

コンスタントに良作を生み出すために必要なのは、「基礎」

すべての花職＝花を扱う人のために

植物のタッチ (表情のあしらい)

基本セオリーがわかる 花のデザイン

号外 2019年

05.30 発行

花職向上委員会

FA Floristry Advancement Committee

花職向上委員会のはじまりは、技術向上を目的として集い、ディスカッションできる土壌づくりからはじめました。共通の言葉で、技術を互いに切磋琢磨していく集いです。技術の向上ばかりでなく、一般の方への認知、流通、品質、花育など、次第に広がってきました。今後も拡大し続け、花卉業界きってのファーストベンギンにふさわしい委員会でありたいと思います。

花職は「花を扱うすべての人」としています。英語表記では“Floristry”としており、生産から流通も含めた単語を使用しています。今までも、これからも私達は垣根を超えつなかり、形成していきたいと願っています。

撮影 / 文 / デザイン 磯部健司 (同委員長)
編集協力 竹内美穂

花職向上委員会は、花の扱いや歴史、テクニックなどの基本セオリーがまるごとわかる本を刊行しています(誠文堂新光社)。現在、基礎2冊+デザインアラカルト1冊のシリーズで3冊を発売中です。そしてシリーズ企画の最後となる4冊目「基礎③～知識の仕上げ～」を現在制作中です。2020年秋刊行予定で進めていますので、是非ご期待ください。

その制作中、様々なディスカッションの中から誕生した基本セオリーがあります。これは次の刊の出版を待たず早々に、正確に広くすべての花の職に携わる方々に届けたいと思い、この資料を制作し発表します。

この理論は、誰もが気づいていたことかも知れません。自然に肌で感じ受け入れていたものかも知れません。「ニュートンのリンゴ」のようなもので、誰も知っている単純な事実を、明確に分析し使い分けようとしているものです。

植物を扱う根幹の部分において、重大な「植物のタッチ(表情のあしらい)」を理解することで、さらに先へこの花に携わる職の発展未来への展望が拓けることと思います。是非この機会に、まずは正確な情報としてこの理論を受け取って欲しいと願います。



www.flower-d.com



2014年10月刊行 前書④
花を活ける人が必ず知っておきたい
～歴史・テクニック・デザインテーマ～
ISBN978-4-416-61400-6



2016年10月刊行 基礎①
花の取扱いを学ぶ
—植物を知り、活かす—
ISBN978-4-416-61600-0



2018年10月刊行 基礎②
歴史から学ぶ
—伝統を知り、新しい表現に活かす—
ISBN978-4-416-51890-8

植物のタッチ(表情のあしらい) = 個々の表情(表情豊か)

わたしたちは、「表情豊か」な植物のタッチを基本とし、念頭において植物を扱って来ました。なぜなら、植物はとてもいきいきとしており、表情が豊かだと考えているからです。

それはコルプラントがすべての植物には精が宿り、すべてが表情豊かだと説いたことから解ります。

(⇒ 基礎①p121 参照 [歴史～表情豊かに])

また、1600～1800年頃のダッチアンドフレミッシュ(花の絵)において、画家の手によって培われた花の表現の歴史からも垣間見ることができます。当時は花の職人やデザイナーもいなかったため、これらの花の絵は季節それぞれに画家がスケッチしたものからはじまり、画家のイメージーションによって完成されたものです。ですから長さ、大きさ、季節、リアリティーに欠けており、中にはキリスト教の影響があるものも幾つか存在します。多くの情報をもつ花の絵ではありますが、ここではそれぞれの花の表情について考えていきます。

この2作品は、ダッチアンドフレミッシュの初期(左)と中期(右)の印象で制作したものです。花の表情そして構図に変化がでてきます。



一般的にこれらの花の絵の時代は3期に分割されます。

初期は固い表情や動きで、花を並べているだけものが多く、それぞれの花の向きも一定方向に向いているものがほとんどです。時代と共に画家たちの表現力や感情を表現することが可能になったのか、中期頃にかけてそれぞれの花の表情や動きがとても豊かになっていきます。さらには配置によって全体の「構図の流れ」が発生してきました。そして後期になると、さらに誇張された動きや構図に発展していき、現代の花の技術をもってしても表現できるかが難しいような表現となっていきました。

多くの画家たちが研究した、表情豊かに表現する方法は、おおいに私たちが勉強する必要があるでしょう。特に「中期頃の表現方法」が最も研究し、再現する価値があると思います。

このように「花の絵」からも、花々をいきいきと表情豊かにあしらうことの重要性が解ってきます。ダッチアンドフレミッシュは、前書にも別の視点で紹介しています。

(⇒ 基礎①p104 参照・

⇒ 基礎②p50 参照 [ダッチアンドフレミッシュ])

「植物のタッチ」における個々の表情を豊かにする表現方法が主流なのは、今後も変わらないでしょう。ただ今回この定義をすることにより「整った表情」の利点にも気づきました。これからはこの二つの異なるタッチを使いこなし、大いに活用するための方法を模索していくこととなるでしょう。



植物のタッチ(表情のあしらい) = 整った表情 (至~無表情)

丁寧に配置された植物の中で、整然と整理され、一定の表情をしています。全体としてみるととても美しいのですが、個々の表情が弱く「整った表情」になっています。人に例えると(マネキンなど)、目鼻立ちの均整がとれて非常に美しいのですが、その表情に感情が感じられず、欠点が無い、隙がない、だけど特徴が無いようなさまを言います。整った表情が最大まで進むと「無表情」になります。完成度の高い無表情の花は潔癖なのか、冷血なのか、言い方は様々ですが、欠点が無く完璧な様相ととらえることもできるかも知れません。

Design / Daisuke Makizono



私たち花の世界でも同じように整った表情で揃えた場合、個々の表情はしだいに「無表情」に向かっていきます。例えば「花祭壇」においては、マスゲーム的な要素もあり、整った表情の最たるものかもしれません。マスゲームにおいては個々は整った表情でなければ、全体での美しいさまが表現できない場合が多いからでしょう。実はそればかりではなく、表情のあしらい方は暗黙の了解で花の世界に根付いているので、これを理解することで、業界は大きな改革が興ると感じています。

初級の花の勉強では、まずは「かたちの制作」からはいります。その時の花の向き(表情)は一定が美しく、ドーム形であれば、下向きにするのが基本です。片面、三角形などの場合には、中央(フォーカス)に花の向きを向けて制作することもあります。またフラットなマス(塊り)のように単純な場合には、全て上向きで扱っていきます。そうする事で、かたちは安定しますが、全体に整った表情になっていきます。初級の頃に表情をつけることはとても難しいものと言えるでしょう。

そして整った表情の表現のみでステップアップすると、突然の複雑なテクニックでつまずき、理解に苦しむことになるでしょう。(⇒基礎①p91 参照 [複雑なテクニック]) また複数焦点(複雑なテクニック)を使用しても、一定の角度になり、結局無表情よりになってしまい、複雑なテクニックを使用する意味が全く無くなるケースも出てきます。交差の仕組みが重要で、いかに自然的な交差(表情豊か)にするかが決め手となります。(⇒基礎①p100 参照 [交差])

しかし表情をとらえて、豊かに表現することは、高度な専門知識と技術が必要です。また個人の感情の差で表現力も大きく変わってしまうので、統一の表現ができるものではないのかも知れません。言いかえれば大量生産や多くの人の手が関わる場合の「カタログギフト」等では、整った表情が出来映えの統一出来る最も有効的な植物のタッチとも言えます。更に言うならスタッフ教育には「整った表情」のみで行われた場合が多く、「表情豊か」

に制作するには専門的に勉強しなくては出来るようにならないので、デザイナー志望や本人の希望による学びが基本となるでしょう。

造園業(庭師)の世界でも和洋共通で言えることがあります。刈り込みを行って人工的なイメージを強くする(植栽で整った表情を表現)場面が多くあります。生け垣だけでなく、仕立てそのものが無表情(人工的)にしている植栽(松、ツゲ、マキなど)もあります。このように庭の景色は、人工的(無表情)と相反して表情豊かな植栽、枝ぶり、草木などを交えて、コントラストが非常に美しくなっています。

一方私たちの花のデザインの世界でも、特に大型の作品において、植物素材を使用しながら人工的(無表情)な場面をあえて制作し、コントラストで表情豊かな「花」「枝ぶり」などで表現することもあります。この二者間は共存することが可能であると確認できますし、コントラストによってかなり表現力もアップしていきます。

※ 整った表情の最上位を「無表情」と位置付けています。



植物のタッチ(表情のあしらい)

きっかけは、とても些細なことでした。花の完成度について、相容れない2つの思想が存在するのに整理して理解されていないことが問題だと気づいたのが、はじめでした。

青果と生花はその昔区別なく、同じような扱い、販売ルートをとっていた頃には、産地・市場・輸送・生花店でさえ、丁寧に扱っていたとはとてもいいがたい状態でした。しかし現代私たちの仕事は、お客様にそして仕事場でもどれだけ花(植物)を適正に丁寧に扱うかが基本となります。絵や書の世界でも表現を表すのに「筆先(指先)のタッチ」という言い方があるように、かなり基本的なことなので、このように花(植物)の表情のあしらいを「植物のタッチ」としてよんでいきます。

植物のタッチをより丁寧にすることは、とても重要であり確認するまでもないほどの基本です。

丁寧なタッチの中に、相容れない2つの思想があることは、今まで誰でも気づいたことでもあるだろうし、感覚的に受け入れていた方、全く考えなかった方など様々でしょう。基本的すぎてそこに着手したり解説する機会が無かったのかもしれませんが。

長年プロの育成をしてきましたが、「表情のあしらい」についてこんな重大な事を今頃気づくとは、自身でも驚きのことでした。表情豊かな表現がある程度広がった、今の時代だからこそ明確に出てきた案件ともとれます。この重大な分類ですが、どのように解釈したら良いか、それぞれの立場によって異なってくるものと思います。



- ・初級 この段階は花の操作を勉強している最中だと思えます。まずは「私たち」が綺麗に整うように「整った表情」に専念することが重要だと思えます。もちろん「表情豊か」な活け方があることをしっかり認識し、次のステップアップも見据えておいてください。
- ・中級 プロのデザイナーを志望するなら、早い段階で「表情豊か」な表情のあしらい方をマスターすると良いでしょう。それぞれのレベルで豊かさの幅もでできます。その為にも、今一度「整った表情」、植物の向きを一定に(多くの場合、下向き)する行為の再確認をおすすめします。このことで表情をとらえやすくしていきます。その上で、「表情豊か」なあしらい方にとりかかることが解りやすいでしょう。
- ・上級 今まで漠然と、場面によって表情のあしらい方を変えて選択していた方が多いと思えます。私もその1人ですが、今後明確に切り替えて表現ができるようになり、この「表情のあしらい方」は私たちにとっても有意義なことです。表情豊か、整った表情どちらも表情のあしらいではありますが、場面や用途によって異なります。どちらが優劣でなく、作品やケース(例えばTPO)で選択しなければなりません。
デザインコンテストにおいても同じことで、作品によってどちらが最適かを検討して制作、または審査をしていかなければなりません。両方が共存するものですから。
- ・一般の方 両方の良さを知って欲しいです。また好みもあるようで、お客様によって好みの差が大きいと感じています。小売店の店頭において、お客様それぞれの好みを聞いてから、制作した方が間違いなく求められているものを提供できると最近感じています。

立場それぞれへのメッセージを経て考えると、より深くこの表情のあしらい方について理解が進みます。多くの場合に「整った表情」は、存在自体が「主張しすぎない」点がありそのメリットもあります。何個も同じものを並べる時、土台や場面として主役が別にあるとき、無機質に飾りたい時などさまざまです。一方表情豊かの場合には、その存在そのものがある程度主張する事が多いようです。

表情豊かなものには豊かさのレベルがあります。より情緒的に、感情的に、活けられている場合には、多くの

方を感動させることが可能だと考えており、一方あまり表情が良くない場合には、丁寧に欠けるように感じられることもあります。もちろん、整った表情にも精密さのレベルがあります。より精密の方がクオリティーが高く、最終的に「無表情」になります。無表情だからこそ、表情豊かなタッチとのコントラストが美しい作品の制作も可能となります。

これら表情のあしらい方は、はじめてまとめたものですが、今後は必須の情報ですので、ぜひ今一度、友人同士でもディスカッションをしてみたいかがでしょうか。